

オリーブの樹

第125号

2014年9月14日

شجرة الزيتون

早期釈放！ 重刑策動をはね返し、重信さんを支えていこう！



断食日
明けてもガサに
祝祭なく

殺され殺され

殺されゆく

民よ

音

目次

- P 2 7月8月の歌 重信房子
- P 3 独居より 重信房子
- P13 読んだ本など 重信房子
- P17 安倍にNOだ！ 辻邦
- P18 アラブ物語27 「パリ事件」ハーグ闘争から日本赤軍結成へ
—74年(5) 重信房子

重信房子さんを支える会

七月八月の歌

重信 房子

鳳仙花独り弾ける夏のタカナカナ鳴きて秋を告げたり

少しづつ秋が近づく音がする朝の涼風夕の虫の音

初盆の友の居る寺華やぎて今を盛りとのうぜんかずら

七時間休戦中のガザの街見上げる空に上弦の月

梅雨明けの茜に染まる夕間暮咲き初めしムクゲ静かに落つる

虐殺を「自衛」とうそぶくイスラエル戦争犯罪今日も止まらず

パレスチナ憤り哀しみ天を衝く「自衛」の欺瞞の殺戮続く

眠られぬ真夜に遙けき列車行く旧友の乗り逝く銀河鉄道

獄の庭境界越えて登り咲くヒルガオの花自由の幻



読居よ! 7月6日~9月8日

加害者が加害の同胞のみ悼む
イスラエルと日本自衛の名にて

重信 房子

7月6日 この週末は「炎立つ」一巻から四巻まで、途中で止められず熱中して読んでしまいました。平泉の初まりを築いた藤原清衡に連なるその前史の父経清や安倍一族の朝廷との壮烈な戦いの物語です。朝廷は東北の民を「蝦夷」「俘囚」と侮り、ひどい仕打ちを繰り返しますが、安倍一族の抵抗からその権力闘争、人間関係をロマンと史実を踏まえつつの歴史小説です。「火怨」もそうでしたが理不尽な中央政府に、人間らしい生活を求めて異議申し立ててたちあがるストーリーに心躍ります。

7月7日 今日は新聞休刊日。でもお便りや資料で外の社会に触れています。7月1日首相官邸前には「閣議決定させるものか!」と一万をこえる人々がどんどん集ったとのこと。その迫力と熱気はすごいものだったようです。目の前の国民を無視して「国民の生命、自由及び幸福追求」という口実で戦争をという流れは「許さぬ!」と続々の人々の波。権力側は霞ヶ関メトロ口を塞いだり、官邸前には「歩道を歩く人を守る」との口実で鉄柵を人々の真ん中に持ち込みました。「昨日までなかったのに突然なんなんだ!」と人々も引き下がらず睨み合い。どんだん人が集って警察も鉄柵を撤去せざるをえなくなったそうです。友人たち各地で声を上げています。連帯!

届いた資料雑誌の中に「週刊文春」阿川佐和子インタビューにメイが載っていました。厳しい子供時代の環境について語っているもので、申し訳ない思いです。それにしても対談の後の阿川さんのコメント「一筆御礼」はいいものでした。「(メイの印象を好意的に記した後で) 帰国して銀行口座を開こうと思ったら『テロリストのお金を預かることはできない』と拒否された話を伺って『ひどい!』と反応した。でも私とてメイさんの母上やその仲間たちに対して長らく『テルアビブ空港で銃を乱射した悪い人たち』と思い込んでいたもの。世界で何が起きているのか、真実はどこにあるのか。表面的な情報に翻弄されることがどれほど恐ろしいか。メイさんとの出会いはメディアに関する人間として姿勢を正される時間でした」とのこと。

イスラエルがきつとすかさず抗議しているでしょう。13年前メイが帰国後パレスチナ問題を語り始め

た時、イスラエル大使館がそれを抗議したのを思い返しています。

7月8日 今日たくさんの資料雑誌が届きました。「創」篠田編集長がフセンを付けて送って下さったところを開いたら、篠田編集長のメイへのインタビュー記事が載っていました。阿川インタビューと違って映画「革命の子どもたち」の中味について。ことにメイ自身がおかれた環境とドイツのベティーナ・ロール(ウイリケ・マインホフの娘)の環境や状況のちがいがなどについて語っているものです。とても良い対談になっていました。

「キタコブシ」162号を読み出したところで驚きました。将司さんの5月14日日誌に「4月28日差し入れのキタコブシ161号を5月14日にやっと入手。」「抹消(墨塗り)されたのは房子さんの6頁の8~9行と28~29行、7頁の最後の2行。前後の脈絡からなぜ抹消されなくてはならないのか理解に苦しむ〜」とありました。私はまっとうに「将司さんが親族に負担になると医務親族面会は不要としている件について、不測の事態になった時のことを考え、当局と獄外友人には信頼関係はないので、可能な限り親族面会をするように勧めたものでした。権利として他の人々のためにも。その文の中で八王子医療刑は当局側からしっかりと親族面会を求めるが、東拘はそうではない点も書いたのがそれが抹消になったのか? 東拘医療を改善する助言方向が不可だったのかもしれない。」

パレスチナは新しい「インティファダ」のような情勢です。イスラエル入植者によるパレスチナ少年虐殺(それ以前のユダヤ人少年が何者かに拉致された上殺された件で、イスラエルは600人以上のパレスチナ人を拘束し何百ヵ所も搜索)に抗議して東エルサレム、ヨルダン川西岸各地、イスラエル内のアラブパレスチナ居住地、ガザと全土で怒りの意思を表明しています。ガザからのロケット弾攻撃に対してイスラエルは空爆を強化。

一方イスラエルはシリア内戦への介入を強め、トルコに謝罪しつつ(トルコのガザ支援船を攻撃殺害した2010年の件)関係を再開し、クルド地域政府へ政

治軍事経済協力し、レバノン・シリア派ヒズブッラーに対しては空爆など攻撃を強化しているようです。シリア、イラク、パレスチナ、レバノン、エジプトで、更に熱戦が危惧される夏です。イスラエルはパレスチナの分裂を策動して、攻撃や空爆を更に強めています。パレスチナ人弾圧強化の中で、民衆の蜂起的狀況をかつてのように支えるシリア、ヨルダン、エジプト、レバノンではありません。それらの日々の戦乱とそこに居るパレスチナ住民らも気がかりです。

7月9日 昨日もガザに対しイスラエルは全土空爆を行ったとの記事。激しい攻撃はハマスを破壊することでパレスチナ統一政府を崩壊させるもくろみでしょう。でも、人々は統一と反撃をもってイスラエルの占領支配に抗するでしょう。

パレスチナやアラブの地の熱い闘いと闘い方はちがっても、日本でも熱い闘いが続いています。集団的自衛権行使容認を許さない闘いは「ああ、これはいっさなんだと実感しました。どこまでも阻止しようと闘いは続くので『フクシマ原発事故』と『集団的自衛権行使容認』は権力との戦後ゆずれない闘い、いっさだ」とMさん。闘いは益々広がっていくはず。更なる前進に連帯！

こうした闘いの先頭にいつも居た旧友が突然の癌とのこと、U君ら友人たちより「口惜しい！」と友情の便りが届きます。本人は意気軒昂とのこと。彼らしい「がんばるな」ではなく、やっぱり「がんばれ！」と言いたいです。連帯！みんなに！世界に！

7月10日 タガ、土曜会のYさんから『テアトル新宿』で7月5日から上映されている映画『革命の子どもたち』の初日舞台挨拶の様子を報告します」と、なんと草々と送って下さいました。「早く様子が知りたいだろう」と慮って下さった編集室や土曜会の友情に感激です。この様子を読んで、だいたい映画がどんな構成なのかと判りとても嬉しい。初日挨拶のメイの話、足立さんの話を読みながら、70年代の厳しくも楽天に満ちていた日々を描きながらその場に共に在って、今は彼岸にある仲間も浮かんで思わず涙がこみ上げてしまいます。

「皆さん、こんなに大勢来られるとは思わなかった。立ち見だと教えてもらってびっくりしました。ほんとうにより多くの人にちょっとでも違うアングル、違う角度でこの話を見ていただきたいと思っていたので、本当にありがとうございます」の、メイの第一声からじっくり読んでいます。みんなに感謝ばかりです。

7月11日 もう梅雨明け？ 起床時から快晴。台風8号は去ったようです。今日はもう真夏日！

アラブでは、ラマダンの半分が終わり、これからさらに夏の厳しいラマダンが続く中、イスラエルの空爆はガザに550ヵ所以上、死傷者は500人くらいとのこと。パレスチナの西岸も、ガザも、怒りの垣根、悲しみの垣根でしょう。国際社会はイスラエルの犯罪を許してきた責任を今に至るまで正そうとしません。

「公正のない世界」は、中東問題、パレスチナ問題の根本なのに。イスラエルは、さらに、「攻撃強化」を宣言し、4万人の予備役を招集すると決めたとのこと。ガザ侵略含めて、パレスチナ西岸も暴力でパレスチナを黙らせようと。黙る筈もなく抵抗を育てるばかりです。戦争し続け、「軍事国家」の体制をとらないと国家が成り立たないのがイスラエルです。多民族国家の実体をも認めないで、「ユダヤ人国家」と言いつけるシオニストたちの破産の道。

デジカメ歌人“小暑”は河川敷に咲く白、ピンク、えんじ色のコスモス！もう？！“なじられようが蔑まれようが脅かされようが七十年育みしもの我らは捨てず”“空梅雨の静かな夕に雨蛙怒るが如く鳴き庭支配す”炎暑はじまりますね。お互いに気をつけたいです。

宮崎先生“天月は嵐猛るも不動なり”“杖無くも行けると言うに杖持たせ”順調に回復しておられます。先生が総長の時に考え、建てた「明大リパティータワー」で6月19日に予定されていた「安倍政治と平和・原発・基地を考える集会」（主催は「マスコミ九条の会」と「日本ジャーナリスト会議」）の開催一週間前に、「使用拒否」を明大当局が決めたのを知っておられましたか？「自由と自治」を掲げた「他よりましな明大」でも、「政治的中立」を理由に思想信条の自由を封殺する挙に出る時代だと改めて驚きます。金子勝教授やジャーナリスト青木理さんが講演するもので、急遽文京区民センターに場所を変え350人以上の盛況で開かれたとのことですが、“場”が失われるのは、こわいですね。

7月10日の新聞にも「法制審議会」で答申案が決定されていますが、「可視化2%、司法取引導入、捜査側意向強く反映」の記事。村木さん、周防監督の「がんばり」がなければ、もっとひどいものだったようです。「議論やり直し」を冤罪被害者の首家さんらは求め、申し入れ書を提出したとのこと。証拠捏造が巧妙に行われる「部分可視化」は危険極まりないし、冤罪を急増させる司法取引の新設など、焼け太り。「大学の自治」や「自由」の封殺共々、危険で「いやな感じ」が広がっています。

7月14日 この間、パレスチナ・ガザ地区はイスラエルの無差別空爆にさらされ、13日未明にかけては特殊部隊をガザ北部に投入し、破壊を行い、また境界には地上侵略体制を整えたとのこと。ガザの住民全体に対する「懲罰」空爆が地上戦へと危機深まる中アメリカはイスラエルの行動を「自衛権の行使」と安理理で擁護しているとのこと。いつもの不正義にパレスチナの人々はどんな思いでしょう。これが「自衛」とは……。 「自衛」は侵略の道。日本も。

7月15日 真夏の季節。

資料、お便りなどありがとう。『人民新聞』では、イスラエル在住ガリコ美恵子さん「イスラエル少年3名の拉致事件口実にしたイスラエル大規模侵攻」「根拠無く『ハマスが犯人』と断定、『捜索』口実に侵攻・空爆」など、イスラエル内部から告発している記事を読んでいるところ。衝にあふれる「アラブ人を殺せ」の声など、詳しい現場現実の様子に触れ、パレスチナ人を人間と思わない弾圧が続く日々を伝えています。私たちがアラブで闘っていた当時と変わらない……。

「オスロ合意」によって幻想に歩を進めた現実、さらに直接過酷に占領下のパレスチナ人を弾圧しています。「西岸自治区」はイスラエルの侵攻で「自治」も「主権」もない。西岸、各地でパレスチナ人をリンチしているとのこと。ガザの空爆も14日現在で172人殺し、1200人以上を負傷させています。憤りに震えるばかりです。

7月16日 暑い中、「集団自衛権」の国会審議に国会前で「閣議決定撤回」を求めて断固とした闘いが続いています。滋賀県知事選でも自民党は破れ、「脱原発」に向かう「卒原発」側が勝利。国民の意思を多様に伝える中でも、もっと効果が育ちそうな夏です。

ガザでは「エジプト政府が停戦案」とのこと。クーデターで同胞団を破壊した政権らしい措置です。ガザの境界を開けようともせず、両者が停戦したら治安条件を満たした人と物質に、エジプトとの境界検問所の通行を許すというものらしい。パレスチナへの人道的対応すら見えません。それでも住民たちのために停戦を！と願うばかりです。

資料「革命の子どもたち」に関する誌紙やネットの記事送ってくださってありがとうございます。メイのインタビューや監督オサリバンのインタビューやコメント、この映画を観た人の感想など資料の他、配給会社の人からも「満席立ち見の好スタートとなりました！今も、その勢いは止まることなく様々な映画関係

者の方から『ヒットしているね。おめでとう！』と言われています。映画はまだまだ全国で30館以上公開を控えております」と、お便りがありました。とてもうれしいです。「観に来る人がいるのかな……、赤字になるのに……大変だなあ」と案じていましたので、少しほっとしました。

7月17日 夏の運動場は気持ち良い。むくげのピンクの花が咲きました。クローバーはまだ盛りでも、ねじ花立ち枯れて、えのころ草がもう穂を豊かに垂れはじめました。日射の土の上を歩いていると、ふと、アラブの街道のような錯覚。パレスチナで、シリアで、エジプトで、レバノンで、友人たちの厳しい闘いを想います。

30分の運動を終え、拭身後すぐ診察。主治医からコレステロールの検査結果、やはりLDH（悪玉コレステロール）値が206と高すぎるのが判明したことを知らせてくれました。中性脂肪値も高いし、また薬を飲むことになりました。動脈硬化症に対する予防です。

今日の新聞では、「川内原発再稼働へ」と、規制委の「できレース」「新基準満たす」の記事。フクシマも解決し得ないままに。住民市民の退かない闘いがさらに深まる夏です。

お便りありがとう、海外の様子伝えてくれて助かっています。ドイツ紙がこぞってNHKの「集団的自衛権抗議の焼身自殺報道」の欠落を指摘しているとのこと。本当に。

7月18日 降り出しそうな空で、ベランダ運動に出るとひんやりと涼しい。

「オリーブの樹」の「革命の子どもたち」上映初日のトーク再録を読みつつ「あの頃」を思い出しています。足立さんの話の中でメイの国籍をどうするかで「よし決めた、俺の娘にする！」と若ちゃんが話したことが語られています。そうなのです。イスラエルなど「敵に情報を与えない」という意図で、国籍申請しなかった側面と同時に、当時の日本は「男優位社会」がもたらした「国籍法」にも現れていたのです。「日本人父親・外国人母親の子に日本国籍は与えられる」が「外国人父親・日本人母親の子には日本国籍は、国籍法によって拒まれていた」のです。海外の日本人母親たちや、土井社会党など「国籍法改正」を求める運動が広がって、86年にやっと国籍法が改正され「どちらか一方の親が日本人なら日本国籍が付与される」ことになったのです。メイのことを知る友人たちもそうした努力をし

てくれたのでした。でも、今も日本は政治にも官僚にも同じ「男社会の論理」が強く支配しています。

友人から「原発再稼働、集団的自衛権行使は戦争への道『平和ボケ』の人々の身勝手な日本の戦争への道です。九条を『平和ボケ』という人々こそ、ボケているのです」と。今、夜8時のJウエブのニュースで「イスラエル軍のガザ侵攻」「マレーシア旅客機がウクライナ東部に墜落、撃ち落とされたのか」のニュース。国際政治は激しく動いている中で「九条、平和外交堅持」こそ世界の希望です。

7月20日 3連休の間中、新聞とほんの短いラジオニュースでパレスチナ・ガザのイスラエルの虐殺行ために憤り、案じてばかりでした。いつものイスラエルのやり口ですが、国際プロパガンダ用に「攻撃地区の住民にピラをまいて警告した」とか、アリバイづくりをやりながら、実は無差別に警告の地域外で攻撃を繰り返すのです。または警告して5分10分で避難させずに殺しています。多くの子どもの死傷者の数が歴然とそれを示しています。「イスラエルもハマスの暴力を止めよ」と言いつつ、イスラエルの虐殺とハマスの強いられた抵抗を同一視するのは世論操作を感じます。「自衛」とイスラエルの虐殺と侵略占領、無差別攻撃を許すアメリカ政府は犯罪を増殖しています。

“虐殺のいや増すまにみつめられ見捨てられてるパレスチナの民”怒りの一首が零れます。

7月23日 “大暑”です。暑いのは歓迎の私です。でも熱中症にならないよう注意しないと、と言われてます。夏になるとやっとな冬の寒いのを忘れられます。今日の朝日朝刊「ひと」欄にメイが出ていました。「革命の子どもたち」のことです。「日本赤軍はパレスチナでは英雄だった。帰国後、母が『テロリスト』『人



殺し』と呼ばれることに強い衝撃を受けた。母は公判で『未熟さの中で当事者でない人々を戦争に巻き込み苦痛を与えた』と謝罪。娘は『母たちの活動の背景には当時の時代状況があったが、今は過ちにしか見えないかも。私は違う解決の方法を探したい』と語る。レバノンを拠点にジャーナリストとして活動』などと紹介されています。

M子さんから資料とお便り。彼の癌治療で大多忙、精神的にも大変なのありがとうございます。友人たちが大変よく支えてくれているとのこと。『あなたこれまでどんなことしてきたん?』と私が問う程です。ありがたいです。私は何もできなくて申し訳ないです。彼も日記はつけていると思いますが、日々「メディカルレポート」をつけておくと良いです。体調(熱、便回数、食べたもの、食欲)薬、処方、治療と身体精神の反応、感じたことなど項目が一覧できるように書くといいです。10日、一ヵ月と日が経っても、記録をみながら振り返ると何が良く何がダメかわかります。「記憶」は案外あてになりません。再開乾杯を必ず! と思っています。どうか難しい治療を乗り越えて下さい。私も励まされています。

またTさんからガザの様子レポート。ひどいですね。刻々と虐殺が行われている様子、資料で胸が震えます。今日の「天声人語」でも「パレスチナ自治区ガザへのイスラエルの攻撃で死者500人超え、国連は例によって音無し」「今の話ではない。五年前の1月の当欄の一節である」と記しています。米は「ウクライナ」を騒がせてる同じ基準でガザを見ないので、国連も音無しなのです。米国のダブルスタンダードの犯罪。昨日の朝刊一面に「祈り届いて」と「21日明治公園集会のろうそくと人文字で即時停戦と平和を訴えた」と「GAZA」の人文字。涙が出てしまいました。

人々の訴え、ガザの人々の恐怖と痛みに、まだ「イスラエルの自衛」を正当化するイスラエル、アメリカ。振り返ってみればパレスチナの歴史はこの構造の中で翻弄され続けてきたのです。パレスチナ解放は世界的人間的解放だと改めて思います。世界革命! 今、安倍政権は「武器輸出原則」を緩和し、イスラエルに渡る武器の当事国になる日本、人々の側ももっと手を結ばなくては……!

7月24日 「大暑」らしい猛暑の八王子です。ガザの暑さ、ラマダン中の苦しさ、「殺人を国家政策」とするイスラエルへの“寛大な”国際社会、47年パレスチナ分割決議のまま不公正が続いています。強いられた戦争下のパレスチナ人の闘いが非難されるいわれは

ない! 黙々と歩きつつパレスチナ側の反撃、抵抗に連帯しています。

夕方友人から速報として、世界各地でイスラエルに抗議が広がっていると伝えてくれています。

「東アジアでは東京、京都、大阪、広島、ソウル、台北で。東京では19日在日外国人300人がイスラエル大使館に抗議。21日明治公園ガザキャンドルに500人以上、23日午前11時より日本平和委員会が大使館前抗議、25日反貧困グループなどが抗議予定と続いています。

またパレスチナ側による『迎撃映像』がネット配信されはじめました。RPG(注:対戦車手榴弾発射器)でイスラエル軍輸送車が破壊されたり、イスラエル兵士が反撃される映像』とのこと。加えて、「パレスチナ人は占領下『イスラエル内』含めて抗議やゼネストでガザの人民連帯に闘っている」のです。

22日米国欧州などの航空当局がイスラエルへの『飛行禁止』を決めたとのこと。これは、イスラエルのジェノサイドに『制裁』した結果ではなく、ウクライナ事故を教訓に、ハマスのロケットを避けるためのものですが、パレスチナの人々は喜んでいてでしょう。長期戦になれば、イスラエルはどれ程多くパレスチナ人を虐殺しても不利になるばかりです。パレスチナに勝利を! 胸一杯に念じています。

7月25日 真盛りの夏。都心も初の猛暑日らしい。久しぶりに姉の面会。身体の調子や指名医のこと、話しているうちに早くも30分。暑い中、来てくれてありがとうございます!

友人からガザの情勢、またパレスチナ全土での抗議、抵抗のインティファダが起きている様子も伝えてくれています。きっと殺され続けるパレスチナに生まれた人々の不条理に涙しながら書き伝えて下さっているのだと推察します。連帯を共に!

Oさん久しぶり! ありがとう。松森さん追悼の春の写真、みな元気そう。「エジプト政府は国境線を封鎖。退路を断たれ“壁”で囲まれた都市に“地上侵攻”という表現に呆れるばかりです」と。ネットから「暴力の応酬」って言うな! 世界人権宣言とガザ虐殺の不条理を送ってくださってありがとう。人権宣言の「いかなる差別もなしに法の平等な保障を受ける権利」をどうしてパレスチナ人だけが例外に置かれているのか! と憤りの一文です。

夜ニュースでパレスチナとイスラエルの短い休戦が成ったとのこと。でもイスラエルが軍隊をガザに留め破壊をくりかえして空爆を一時止めているにすぎな

い限り、ハマスは休戦から停戦へは許さないでしょう。ラマダンの最後そして祝日のガザに虐殺が停止することを最も望んでいる人たちが闘わざるをえないのです。圧倒的な軍事兵力を持って、圧倒的に劣勢の軍事力のハマスをつぶそうとしても、パレスチナの平和の大義はゆるぎなく優勢で、イスラエルは何も得られないでしょう。

7月28日 今日、東北を含めて全国梅雨明けとのこと。猛暑続きでしたが(金)の夜に65才以上の人に冷し枕(アイソノンのようなもの)が配られました。熱中症対策。今年から初の試みです。(土)(日)と熱帯夜を快適に過ごしました。夜8時に渡され翌朝返すのです。病人の高齢者にとってはありがたいと、今日のベランダ運動の時に話合いました。

イスラエル軍のジェノサイドは続いています。テルアビブでガザ侵攻に反対する数千のイスラエル人が「我々は敵になることを拒む」と声をあげたとのこと。政府に同調する右派らの包囲下での左派の反戦集会。世界の良心と連動しています。ラマダンの明けたパレスチナ、アラブ、シリア、レバノンの戦火に晒された人びとや友人たちにあいさつを送ります。連帯!

7月29日 28日はイスラムの断食明けの祭り、パレスチナ全土でガザに連帯し、抗議を続けているでしょう。そしてまた、アラブ各地で戦火の中、パレスチナ人民連帯、反占領闘争の意義が思い返されているでしょうか。反イスラエルの闘いへ! イラクでもシリアでも。

Sさんお便りや本ありがとうございます。「先日『革命の子どもたち』を見て来ました。数十年ぶりの字幕、読み切れなくてショック。眼も頭も“高齢者”か……。お陰で二度見てしまいました。60~70年代の熱い時代の記録としても革命を生きた女の記録としても、過酷な境遇を生きた女たちの記録としても良い映画でした」とのこと。

私も送ってくださった『革命の子どもたち』のパンフのオサリバン監督と津田大介さんの対談を読んで、映画の意義を知った思いです。(日本で上映されると知って、公安情報によって歪曲、フレームアップされた私たちの姿が少しでも日本で正されたい、などと思っていたのでした。矮小化してその一面でとらえがちでした。)オサリバン監督は「世界の闘い」の側からの視点で「資本主義がある意味アウトオブコントロールとなっている」現在、「世界は何かを考え直さなければならぬ」という問題意識の中で、過去の象徴的な

闘いに60年代の時代の子どもたちであるマインホフや私、そして現在のメイやベティーナを通して、社会に提示しているのだと理解しました。いわば革命や変革の意志の継承性を示し、現在の「何か」の問題意識へと転換して欲しいという意志を感じました。たとえそれが失敗の教訓であっても、その当時のみんなが正しいと闘っていたことを捨象しない姿勢がメイやベティーナ含む「生きた女たち」のこれからもつながるのでしょね。パンフは映画を見れない私にはとても役立ちました!

8月1日 昨、31日に、灼熱の10時半~11時、グラウンドを走ったり、ちょっと自己過信して疲れてしまった。やはり歳のせい、すぐ回復せず、今日まで肺のあたりがゼイゼイして、ベランダ体操は走りをやめて、ゆっくりウォーキング。

友人がネット記事でガザの様子を伝えてくれます。今日は、京大の岡真理さんが「停戦を拒否するハマス」なる虚報に真実を伝える内容がネットに載っていると送ってくれました。

「(前略)日本の主流メディアの報道振りを見ていると、ハマスが停戦を受入れないことがパレスチナ人・イスラエル人双方の死者の拡大を招いており、700人を超えるパレスチナ人が犠牲になっっているのは、ハマスの責任であるかのような印象を抱いてしまいます。問題の根源には、ガザの封鎖と占領という問題があるわけですが、日本の主流メディアは、ガザが47年にわたり国際法上違法な占領下にあり、また8年にわたり国際法上違法な封鎖下にあり、占領と封鎖により、住民がその基本的な権利をことごとく否定されているという事実をほとんどまったく報道していません」と岡さんは伝えて、

「しかし、ハマスは、先のエジプトによる休戦案を拒否した直後、10年間の休戦協定をイスラエルに提案しています」と、岡さんは、「10年間の休戦協定のための10の条件」をネット上で記しています。その文を今読みました。

こうした公正な立場からしっかりと事実を示して訴える岡真理教員の内容は説得力があります。若い人たちはネットを通して真実を手にすることができる分、パレスチナ問題は昔より近くなっているのでしょうか。それにしても虐殺され、負傷したパレスチナの人々の苦しみ、痛み、これが66年以上持続的に今日まで来ている、そんな世界が同時代の地球上に在ること、日本人は実感としてはなかなか理解仕切れないのでしょ。

この「10の条件」をどうして日本のメディア(主要新聞)は報道しないのでしょうか。アメリカの色眼鏡は、いつまでも日本の眼鏡になったままなのでしょう。(紙面の都合上ここにも転載を略します)

8月4日 ずっと猛暑です。夜の冷やし枕にほっと救われる週末でした。

パレスチナへのイスラエルの虐殺は続いています。自分たちで勘違いして「ハマスがイスラエル兵を拉致した!」と騒ぎ立てて、200人を殺し、何千人も負傷させて、停戦を破壊したのはイスラエルです。ハマスが「自作自演」とイスラエルを非難したのは当然です。日本の新聞読んでみると、知らず知らず洗脳されます。「イスラエル軍が殺した〜」というところが「何百人死者〜」と読んでいながら「虐殺」が交通事故などの「事故死」の死のように軽くなってしまいます。「言葉」の一つ一つに巧妙な色眼鏡がかかっていることを忘れないようにしましょう。

「レコンキスタ」には、駐日パレスチナ代表部と駐日アラブ各国大使の声明が載っています。イスラエルのガザへの攻撃を即刻中止するよう日本政府に要請する各国大使声明と、PLO代表部による「親愛なる友人ならびに支援者の皆様へ」とするガザの状況への原因と現状イスラエル批判の上、友人たちに日本政府からイスラエル政府に圧力をかけてくれるよう訴えているものです。

77年PLO東京事務所が設置され、日本の民衆運動を大切にしながら活動してきたPLOでしたが、今では「オスロ合意」を経て、外交的役割を重視し、日本の援助を求め、政府とのつながりを重視しています。パレスチナ人民にとって日本の援助は役立つものにしてほしいし、(イスラエル支配に役立つヨルダン川西岸の「回廊」のプランのようなものではなく)PLOを批判する考えはありませんが、人民連帯をPLO共々さらに発展させてほしいと願わずにはいられません。初代PLO事務所長ハミード氏の日本の労働運動に依拠した粘り強い活動あってこそ現在の現在です。

デジカメ歌人から大暑の暑中見舞いの歌「迫害の犠牲を忘れぬ民族の態度を責めるヘイトスピーチ」夏帽子納戸の奥を水色の匂いと共に占領してる”この二首を選びました。いい歌詠んでおられます。

友人からパレスチナの厳しい様子。虐殺され占領されているパレスチナの自衛を認めず、イスラエル占領軍のホロコースト「民族浄化」を「自衛」のレトリックで正当化する米欧イスラエル。でも、国連の学校への空爆は本質を露わにしています。このガザ・パレス

チナ全土への虐殺の同じ時刻、「ダーイシュ」(アルカイダの「イスラム国」)は、急速に支配を拡大し、シリア東北部、シリアの領土の3分の1を支配するばかりか、アフリカ大陸でも急成長らしい。イスラーム・マグリブのアルカイダ機構も「ダーイシュ」に忠誠を誓う者急増し、エジプトでもアルカイダ系はザワヒリではなく、「ダーイシュ」に忠誠を誓うらしい。中東全土に民族蜂起を実現し得なかった不満の波は「反政府・反米」が求心力となって復古的傾向を助長しています。

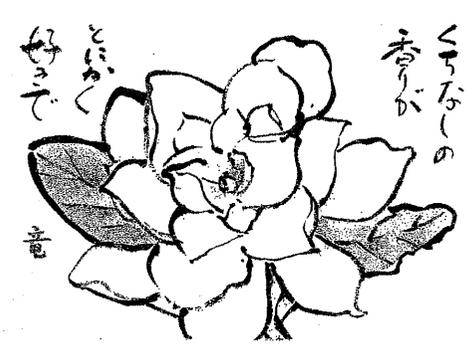
しかし「ダーイシュ」は、シーア派や民衆を襲っても、イスラエルを攻撃したと言う話は聞きません。権力闘争ばかりを戦略としているように思えます。ダーイシュはイスラエルと合わせ鏡のように民衆の暴力支配に結果しています。

8月6日 猛暑、青空に入道雲。69年前のヒロシマを思い黙祷。黙祷していると朝方なのに汗が首をつたっていきます。

新聞では「ガザ戦闘収束の兆し」「3日間停戦」「イスラエル軍撤退完了」の見出し。イスラエルは地上侵略で兵士が殺され、兵士の間に動揺が広がることをおそれ撤退していますが、空爆やミサイルなど収めている気配なし。加えて4日、アメリカはイスラエルの防衛のため「鉄のドーム」に230億ドルの支援の補正予算に署名したオバマ大統領。占領支配下の市民は「ジュネーブ協定」でも保護義務とされているのに、虐殺者に「自衛権」などありえない。不条理の中で育つガザの子供どもたちを思います。

午後診察。8月1日の血液検査の結果を教えてくださいました。腫瘍マーカーは4月に上昇していたものが正常範囲でした。またコレステロールのジェネリック薬のメバルチン系を止めてヘザトール系にしたら「副作用」か、3年来の「軽い肝機能障害」が正常化したとのこと。関連は不明ながらコレステロールも正常化。この薬が体質に合ったみたいですが。抗がん剤もそうですが、本人の体質と合う薬、合わない薬があるのを実感します。

8月7日 N君自己免疫細胞を注入してもらったとのこと。自分の血液を採取してから培養してもらう方法とのこと。血圧もOK、食欲も旺盛らしく癌との新しい闘いが始まっているようですし、本人が決然としているのでホッとします。前にも書きましたが、患者たちの様々な取り組みや治療など副作用対策も載っている月刊「ガンサポート」(エビデンス社)のバックナンバーからN君自身の癌治療に役立つ号を購入して(ネ



ット可)更に視野を広げて治療もれなくやってください。U君の便りから様子を知り共に闘っています。私の方は今は「正常範囲」となった分、また「移監」と言われないか……と気にしています。「重信さんは癌体質なので新しい癌もまた否定できない」と言われている分、チェック可能な八王子はありがたいですが。

ガザのニュース、日本でのガザ虐殺抗議行動のこと、広河さんが発した「ガザ報道に携わるメディア関係者及びその報道に接する人々へ」と題する偏向色メガネ報道を指摘した文など、ありがとう。ブログ管理人も共通の想いであることよくわかります。

8月8日 友人たちからの資料早くも届き、ガザ停戦中の現場に入った土井さん(北部シージャイヤ)田中さん(南部フザーア村虐殺)などイスラエルの戦争犯罪の生々しい記者たちの目撃談、写真、読みながら泣いたという友人と私も同じ。ガザ虐殺はイスラエル内の「アラブ系市民」へのリンチや「アラブ人絶滅」ヘイトスピーチ、ヘイト暴力の排外運動と連動しています。あまりの人間性の破壊に、イスラエルの病気が滅亡にむかっている実態の欠けた「ユダヤ国家」の看板故だと改めて思います。「イスラエルは多民族国家」この現実から出発できないネタニヤフらの犯罪です。闘いはパレスチナ解放まで続かざるをえないでしょう。

8月9日 長崎の原爆忌。黙祷。田上市長は「集団的自衛権」にも言及した平和メッセージを發したとのこと。ヒロシマの日雨だったというし、ナガサキも台風11号接近で雨らしい。

ガザは強いられる抵抗戦争をパレスチナ側は再び強いられて停戦は崩れ、米国はイラク東部への空爆の記事。中東のイラクの灼熱の日々を思い、パレスチナを思いつつ長崎忌です。

8月13日 昨日は雨となり、今日曇りぎみの晴間。

昨日、今日と、ガザのことイラク情勢など、友人たちが資料を送ってくださって、フォローしています。ネットでも送ってくださった岡真理さんやガリコ美恵子さんからのイスラエル内部のレポートなど、今日届いた『人民新聞』にもしっかり転載されています。

それに今届いた8月1日付の板垣雄三先生のインタビュー(「シオニストはホロコーストを利用した」「キエフのユーロマイダンで、イスラエル国防軍の元兵士が暗躍していた」「マレーシアの存在」「ガザ地区ハマスが使用しているロケットの開発者がウクライナ国内で拉致された事例」などをあげて、ウクライナ危機とイスラエルのガザ侵略攻撃のつながりを語っている)もっと読みたいですね。

また、岡さんのネット記事から「エレクトリック・インディファード」のラリー・アブニウマの投稿「ガザの集団虐殺は『ユダヤ国家』の代償」の記事。同感です。「イラン・パペ(イスラエル出身のユダヤ人歴史家)の著書『パレスチナの民族浄化』の中で、パレスチナ人に対する民族浄化は、パレスチナの地にユダヤ国家を創るというシオニズムプロジェクトに、必然的かつ本質的に内包されていたもの」と述べています。

また、アリ・アブニウマは、シャロンの顧問だった人口学権威のアルノン・ソフェルがガザから10年前イスラエル軍常駐支配を撤収する時に、インタビューに答えた予想についても記しています。

「250万の人間が閉鎖されたガザに暮らす時、人間に破局が訪れるであろう。……彼らは今以上に野獣となるだろう。我々が生き残りたいのであれば、我々は殺し、殺し、殺し続けなければならない。毎日毎日朝から晩まで。」私たちにあって唯一の関心事は、これらの殺害を行うことになる少年たち、男性たちが、自分たち家族のもとに戻り、正常な人間となるのをいかにして保証するかである」と語ったことを記し、

アリー・アブニウマは「それから10年後、私たちは確信を持って、イスラエルは『正常な』社会ではないと言えることができる」と述べているように、「多民族国家イスラエル」の現実を認めず、「ユダヤ(シオニズム)国家」とすることによって、民族浄化を不断に行って「ユダヤ人」以外を破壊しなければという病める国の危機的状況を示しています。

イスラエル・ボイコット制裁こそ!

Mさんありがとう! 写真はまだ受け取れていませんが、「イスラエル製のソーダストリームが大阪梅田ヨドバシカメラ店で販売されており、ヨドバシカメラ店前で、私どものささやかな8月9日抗議行動、ボイコット運動が展開されています」とAFPも記事にし

ている現場の写真を送ってくださったとのこと! 連帯と感謝。ありがとう!

ちょうど東京の友人からも「世界各地で活発になっているイスラエル・ボイコットの影響で、対象となっている『ソーダストリーム』の渋谷店が延期となりました」と、今お便りを受け取って知ったところです。

カナダでは大型スーパー内では、来店者にイスラエル商品ボイコットを呼びかけ、実力で外しているし、スターバックスも「支援していない」と声明出したり、BBCロンドン社前で万人の「偏向報道」批判。ホワイトハウス前では、米国籍だったためにエルサレムでイスラエルの暴行から死を逃れたパレスチナ少年たちら数千人で抗議し、「米国民に対するイスラエルの暴行」を米政府に告訴したそうです。

ガザ虐殺にネタニヤフを訪問する日本政府の議員らと何と対象的な世界の動き。日本でのMさんら友人たちの小さくてもしっかりとした人民連帯「イスラエルボイコット」は、世界の人々となつがっています。市民連帯を反戦平和や脱原発含め国境を越えてさらに! と願うばかりです。

8月15日 快晴、69年前のように。敗戦記念日。この日はポツダム宣言を受入れたことを国民に知らせた日で、敗戦日では? 終戦は9月2日。天皇中心のどらえ方から、8・15なのでしょう。安倍は戦争の反省、アジアへのいたわり、償いの言葉なく。時報と共に、私も窓辺に立って反戦の思いとガザのパレスチナに連帯の黙祷。

今日、Mさんが送ってくださった写真のプリント受け取れました。これまで知らなかったことが出ています。ありがとう!

宮崎先生「八月十五日」の題で、六句。「真新しき軍旗を捧げ持ちし日よ」「愚かしき開戦そして敗戦よ」19歳士官の短い日々に関心が響きます。

8月18日 お盆休み明け。やっど一日中蝉が鳴きました。窓から庭を見ると、夏草や萩が四方に伸び、揚羽蝶、とんぼも飛んで、夕方まで猛暑の一日となりました。寒くなるのを残念に思っていた私は大歓迎です。でも、大雨で関西の友人たちは大丈夫でしょうか。

午後診察、CVポートのフラッシュを行い、次の血液検査10月初めと確認しました。

残暑見舞いのお便り感謝。

8・15には京都駅前の関電京都支社抗議の金曜日、シュプレヒコールにも若い人たちが活発なのですね。

「6時半からは、タワーホテル前で緊急の「辺野古沖

ブイ護送反対抗議行動」が提起されました。米軍レーダー設置反対行動も含めて、底辺からの運動の拡大深化が問われる事態になっています。タイミングよく「標的の村」が上映され、良い学習になり、三上監督も見えたとのこと。日本のそうした闘いはガザ・パレスチナとひとつだと思いながら読んでいます。

今日の朝日歌壇に一首。「パレスチナのガザはガゼの語源の地人間の業深いまま血塗られて」ハッとしながら読みました。昔ドクトーラとレバノン南部ラシャディーヤキャンプのクリニックに居た時、年若いパレスチナ人がガゼを当てられながら「ガザ」のことだと言っていたのを思い出します。ガザの方を越える死傷者はどんなに大変でしょう。シリアもイラクもレバノンまでも……。

8月19日 猛暑の日です。

Yさんお便りありがとう。8月2日の土曜会のレポート、暑中20人以上集まって活動の経過報告合っています。砂川闘争の再審を求めた明大先輩の「土屋源太郎さんを囲む会」の計画や福島での活動や「おもいで館・福島子ども保養と夏祭り」の報告、沖縄反戦ツアー報告、沖縄知事選の情勢、新潟柏崎刈葉原発の再稼働を巡る情勢の報告、それに「日大9・30会」からの9・30集い(9月28日)の企画共同など各々が現場で活動したことをレポートし合い、協力調整合っている様子、臨場感共々、声が聞こえてきそう。「今回は『革命の子どもたち』のDVD上映がメインでした」とのこと。みんなで見て、一緒に活動した60年代を語り合ったことでしょう。いつも丁寧な報告に感謝!

旧友から届いたアサヒの「中東マガジン」の記者のリアルな報告、無差別殺戮の様子が分かります。また、白杵陽さん編の「シオニズムの解剖」の内容、これから学習します。暑中我が友ら、60代、70代のパワーに励まされています。

Yさんの資料、ていねいにまとめてくださって「大飯原発差し訴訟判決」の意義や解題読み応えあります。「標的の村」の資料も。その中に、京都の今年の10・21もう第8回ですか?! きっともりありがとうございます! 連帯!

8月20日 「救済」紙544号に「革命の子どもたち」の映画批評が載っていました。その楠山忠之さんの暖かく本質に触れる言葉に励まされています。

T子さんお便りありがとう。「7月24日『革命の子

どもたち』見てきました。とっても深く感動し、考えさせられました……(いっぱい過分な評価感謝、略します。)涙と共に観てくださり、T子さんへの励ましになったとのこと、嬉しい。

8月22日 毎日30度を越えている八王子です。関西、中国地方では記録的雨量で広島では多くの死者が出ているとのこと。ちょうどU君からの手紙でこんな風に記しています。

「先に二度の台風襲来で、連日の暴風雨でも高知、徳島では被害がことその他軽微だったと書きましたが、今回の広島の豪雨による甚大な土砂災害は対照的です。広島など瀬戸内側は南海地震への備えも全くできていないし、まさにこれは『人災』なのです。高知や徳島では早目に大規模に避難準備、勧告指示が出ていました。この高松でも一晩に何度も今回ケータイに地域メールで避難準備が入ってきています」と、たとえば四国では、月一回の町ぐるみ訓練が常態化しているのに比べて、TV画面の広島の被災者が「食べるものも水もない」と嘆いているのを見て、行政のまずさに驚いたとのこと。

「新聞写真で見ると、今回の広島は極端に言えば本来人間が住んではいけないところに家を建てているのです。山から里への出口になっている谷筋はまた水の道でもあるのです。地形を全く考えようとせず無原則野放図に宅地造成した結果が今回の悲劇で、行政の無能が根本にあります」と批判しています。

「豪雨で土砂が流れ肥沃な扇状を形成する里山の農地」には宅地など行政が許さないそうですが、各地行政の取り組みはそんなに違うのかと改めて知りました。「フクシマ」の「人災」以来こうした暮らしの隅々まで「人災」を検証すべきなのですね。

8月25日 今日の新聞ではリビア内戦を伝えていますが、カダフィ政権を破壊するためにNATOの手先になった当時の民兵同士が收拾できない対立に至っているとのこと。当時から、中東情勢を知る者たちが指摘してきたことです。

イラクへの米軍の侵略同様、強権的なアラブ政権下で抑えられていた「秩序」(それが米欧には気にくわな秩序であったとしても)を「気に入らなければ武力で破壊していいのだ」という手本を示したのはイラクの米軍であり、リビアのNATO軍です。「やれ! やれ!」と煽り、武器を大量に与えたのもまた米欧勢力です。

この破壊のやり方に味を占めて、各部族社会がまたは宗教的、イデオロギー的紐帯を基礎に権益を確保す

る「戦争」が行われるのは必然的帰結とも言えます。それまで存在した、気に入らない「秩序」の破壊者米欧はそのあとの権力を掌握できるとでも考えたのでしょうか。愚かなものです。米欧の対処療法は介入と武器供与、空爆と益々泥沼化しそうです。こうしたやり方が「イスラム国」やアルカイダ勢力を益々跋扈させていっています。まっとうに変革を求めて来た人々は、逆に厳しい状況に立たされているのが現状でしょう。

8月26日 新聞で小田原紀雄さんの計報を今知って驚いています。日本基督教団牧師ですが「山谷労働者福祉会館」を労働者の拠点として創設し、常にわけへだてなく弾圧にある者を救い続けてこられた人です。90年第2回多田諦子反権力人権賞を受賞されています。靖国・天皇制問題などの「情報センター通信」を私も送って頂いていつも学習しています。まだ若いのに……。様々に反弾圧戦線など助けてくださったこと、いろいろありがとうございました。慎んで哀悼を捧げます。

8月27日 肌寒い朝です。小雨が降り八王子も23度前後の気温です。

思い返せば、今日は元PFLP議長だったアブ・アリがパレスチナ自地区ラマッラでイスラエルのミサイルによる狙い撃ちで暗殺された日です。2001年からはじまった私の公判がこれから証人申請するところで証人の話をしていた8月に殺され、その後9・11で世界が米ブッシュ Jr 政権によって「反テロ」戦争に駆り立てられていった時です。

西岸で、ガザで、アブ・アリのメモリアル集会が開かれているでしょう。ヨルダンやレバノンの難民キャンプでも、パレスチナの闘いに連帯し哀悼を送ります。

8月29日 今週は月曜から金曜日の今日まで、毎日



小雨が降ったり曇ったりの八王子です。めっきり肌寒くなって、毛布一枚では夜を過ごせなくなりました。今日は使用許可を得て、ベッドの下の大きなプラスチックの袋に入れて収納していた掛け布団を使うことにしました。暑いのは大丈夫でも、寒さには弱い私です。これから、寒さに向かうのかと思うと、行く夏を惜しむ思いしきりです。

差し入れてくださった「泉水国賠通信」は「検査中」とのこと、今日は交付されませんでした。

8月30日 昨日、法務省は2人の死刑を執行したとのこと。安倍政権となって6度目、11人が殺されたとのこと。

同じ29日、日本の「ヘイトスピーチ」の放置に対して、国連人種差別撤廃委員会から毅然と対処取り締まることを求められ、「慰安婦問題」についても被害者への調査や謝罪を求められています。7月24日には、国連規約人権委員会から「死刑制度の廃止」の勧告を受けながらの死刑執行。「アムネスティ」が「勧告直後の執行は国際社会への挑戦」と抗議したのは当然です。人権は軽んじられ、戦争国家化へと進む安倍政権のやり方に怒りとため息です。何とか反撃変革を！と祈るばかりです。きな臭い……。

9月2日 快晴。真青な空を見るのは久しぶり。でも暑すぎずの良い晩夏です。今日は資料やお便りをいくつも受け取れて、早速読んでいます。

「イスラエルのガザ攻撃を助けている」とソニーへの批判読みました。ガザで発見されたロケットの破片から、カメラとハイテクコントロールのミサイルに装備されていたのは、ソニー商品。イスラエルボイコットのみならず、パレスチナ人を殺す武器生産共同社もボイコットすべきだとの声。

5月、安倍・ネタニヤフ会談で、経済関係だけではなく、防衛協力と防衛交流、自衛隊幹部訪問を合意。ガザ・パレスチナ全土占領、アラブとの占領紛争下にあるイスラエルに、なぜ「紛争当事国でない」として「武器移転3原則」が許されるのか？ また、ガザの「停戦」といっても、西岸自治区も、ガザも「臨戦体制」との現地報告。それでも西岸自治区をジェニンでは「我々は勝った！」と、8月26日祝砲の爆竹が停戦を祝っている様子を伝えています。

“「空爆とロケット弾反撃」が「一時停止」したことで「和平到来」かと誤報されてはならない。地上侵攻以前の「飢餓封鎖作戦」という緩慢な集団虐殺に戻っただけだ”と現地レポートは伝えています。

9月4日 今日の新聞に第二次安倍内閣の顔ぶれ、右派ずらりです。自民党の「汚れたハト派」など、「その系譜だった」とも言えないほど、何のハトの糞も見当たらないんじゃないの？ というのが私の印象でした。野党に魅力ある人も見当たらないし、「原発再稼働」「大企業優先」……庶民切り捨てが歯止めなく進むのでしょうか。

9月5日 快晴。今月の布団干しの日。

今日は昨日受け取った「申告票」を提出しました。「関東地方更正保護委員会」に提出する書類です。長期刑の受刑者に対して、「仮釈放」に関して調査するための書類で、提出後更生保護委員会の面接がいつあるとのこと。

「現在収容されている理由」「なぜ事件を起こしたのか、事件当時の生活のどこが悪かったのか」「現在どのように考えているか？」「被害者の方の名と謝罪の内容被害弁償・今後の対応など」「施設での生活態度」「出所後の生活計画」など、4枚に記入して提出しました。「ハーグ事件」など事実誤認の判決のまま、上告まで

争って敗れたことなども記しました。

9月7日 日曜日。肌寒い日。雨が多かったせいか、萩の枝が例年以上に四方八方に生い茂って、花が咲いていませんでした。

今日は「NO NUKES VOICE」をじっくり読んでいます。「脱原発」の立場で闘ういろいろの人（集会組織者、学者、福島住人ら）のインタビュー、人間性も表れてとてもいいものです。

9月8日 週明けの中秋の名月であり、「白露」の今日、曇り空です。「今日は十五夜だけど、見れないかもしれない」と話していたら、やっぱり晴れず、夜には雨が来そうな日です。

9・11はもうすぐですが、9・11よりも82年9・16のサブラ・シャティーラ パレスチナ難民キャンプの虐殺の方が、私には胸に浮かびます。そして、9・13は「オスロ合意」でした。9・28はパレスチナのインティファダの日。

9月はパレスチナの闘う月です。

★読んだ本など★

(「日誌」の中の読んだ本への記述を編集室が抜萃したものです)

重信 房子

大谷先生に送って頂いた「共生社会のリーガルベース(法的基盤)——差別と闘う現場から」(大谷恭子著 現代書館)を読みました。

とつても熱くわかりやすく学習できる本です。差別のせめぎあう現場の事件に携わる弁護士の著者がその解決により良い共生社会の実現を求めて法的側面から捉え提言している本です。その思いはこの本の構成に示されています。それをまず示します。

- 第1章 男女がともに—共生の基盤—
- 第2章 障害者とともに—分け隔てなく—
- 第3章 病気の人とともに—心身を病んでも—
- 第4章 外国人とともに—多様性の尊重—
- 第5章 アイヌ民族とともに—民族としての尊厳—
- 第6章 部落の人とともに—いわれなき差別—
- 第7章 嬬の内と外で—罪を犯しても—
- 第8章 死刑のない社会へ—寛容な精神を—
- 第9章 災者とともに—災害とマイノリティ—
- 第10章 原子力発電のない社会へ—崩れた安全神話—
- 第11章 基地のない社会へ—平和と共生—

以上の11章から成り立っています。

大谷弁護士は、私が2000年11月8日逮捕された日から2001年の公判開始、2010年8月の上告棄却、刑の確定までずっと私の裁判の主任弁護人をつとめて下さった人です。

「本書は2000年に出版した『共生の法律学』(有斐閣)の続編であり、第1章から6章までは前著のその部分を組み換え書き足したものである。前著初版2000年には新世紀が『共生の世紀』になることを期待しうる“共生元年”であるかに思えた。しかし2001年9月ニューヨーク同時多発テロに始まる米軍のアフガニスタン侵攻、イラク空爆等世界の武力紛争はやまず、日本もついに自衛隊を海外に派遣するに至った」と記されているように、私の公判も検察の「反テロ9・11」を利用したキャンペーンの重刑企ての中ですすみしました。

当時日本社会の実情を学ぶ私に、大谷先生が差し入れて下さったのが「共生の法律学」でした。「便利」の名で「管理」のすすむ日本社会の差別の実体を学習することのできる教科書のようなありがたい本でした。

その本から14年。もう一度学習し直すように読みましたが、各章のタイトルに広がり加わっているように、まったく違った本としてとらえています。

この本の生命力のような特徴を私は二つの点から、他の本にはない貴重な価値として読みました。

一つは世界、国際的地平から日本の様々な差別の現実を照射して論じている点です。各章のはじめに日本が世界の差別や人権に関するいくつもの条約をいつ批准したのか、していないのが明瞭にわかるように編まれています。そこからいかに日本の社会が差別の構造を歴史的現代的にもったままにあるのか、それをどのような法的基盤によって克服すべきなのかを論じています。もとより社会の人々の意識が変わらなければ、差別はなくならないことを踏まえ、法的基盤としてもいかに国際的水準にたちおけているか、そしてそれを克服する道は世界の英知によって教訓の中から導かれた人権条約の数々を日本が受け入れ批准し社会の基盤としていく重要性をのべています。

本書の1頁目のはじまりから「はしがき一人権条約を共生社会の法的基盤に！」のタイトルにもなっているようにこの本を貫いている命題がここにあります。そしてそれは本文記述の中でも「世界からの目」で日本の現実をみつめ、エピソードとしてもたとえば被収容者が接見時遮断版で隔てられて話をすることが「わが国ではこれが常識と思われているが、しかしこれは世界の非常識である。」弁護士会で各国大使館にアンケートをとったら「世界でこのような遮断版がある国はわが国とイスラエルそしてイタリアのごく限られた重警備刑務所ぐらいいった。」などいくつもの記述に世界からの視座を据えています。

もう一つの本書の貴重な価値は、著者が弁護人として、ある時は原告のある時は被告の弁護を通して差別と闘い続けてきた、自己の史的総括を率直に記していることです。そのことによって法律や論解にありがちな読者が頭で学ぶ「たいくつさ」がまったくなく学習しやすいのです。各分野の差別と闘い、各現場で新米弁護士として不十分だった自身を率直に記

し、現在の地平からそうした闘いの現場をとらえ返しているからです。そして当時出会った当該者たち、原告、被告、師、友人、両親に至るまで率直な心情を手紙の形で吐露することに読者は共感し法を学ぶ人間的な生命力を感じます。この手紙の中に第7章では丸岡さんへの手紙が収められています。心に触れる共生を求める書です。この本を学びつつ日本がいかに人権後進国か社会の深層を知る思いです。

パレスチナや第三世界においては人権に関する各種の条約・協定決議などはいわば「物差し」として日常的に使われています。植民地支配や強権的な権力下にあつて、解放と革命を求める弱い立場にある者たちの武器として生存の要にあります。

翻って日本は政府に良くも悪くも委ねられてきた結果、国際社会から「2100年以降だけでも国連から日本政府に対し女性差別撤廃委員会、社会権規約委員会、自由権規約委員会、子どもの権利委員会、人種差別撤廃委員会、拷問禁止委員会の6つの各委員会から1.1本の勧告が出されている。当然のことながら条約批准国はそれら勧告を真摯に履行する義務を負わされているが、日本政府はこれを軽んじその履行率は低い」(ヘイトスピーチの取り締まり含む各種のこと)

そうした現実を共生社会へと確実にしていく方法の一つとして著者は第6章の中で「政府から独立した人権救済機関(人権擁護委員会)の設置を」と提言しています。

「わが国には人権侵害に対して速やかに救済しうる機関が存在しない。(中略)そもそも人権擁護局は法務省の監督下にあり独自の調査権限もなく、到底人権侵害に対して速やかに解決する権限も能力も与えられていない。」この点でも「わが国はわが国が批准した人権条約に設置された各委員会からほとんど毎回、政府から独立した人権侵害を調査し救済するための実効性のある制度仕組みを設置するよう勧告されている。」とのこと。

やっとなら2010年勧告を1998年受けて以来はじめて法務省は構想し、不十分とはいえ2012年閣議決定されたが、「2013年現在の政権は人権委員会を設置しないことを公約している。」と著者は批判しています。そういう現実を私は知らなかったのですが、現政権が監視・検証されることを拒む国家主義体質をこの本の中からも学びました。

「先進国」と言いつつ日本が社会の深部にまでも深い差別を抱えており、それを抑制する法的基盤があまりに世界から勧告されてもサボタージュしている現状も知りました。その政府においてはヘイトスピーチ

やいじめが増大する差別の広がりも故あるものです。政府の遅滞を許さぬ各種人権条約を実施する方向の中にこそ悪化する差別を共生社会へとベクトルを変えていく根本であることを学びました。反戦、脱原発など社会の改善をもとめ実践している人々にとっても、学生、若い人々にも是非読んでほしい一冊です。

(8月9日)

Yさんが送ってくださった秋山駿の本「私の文学遍歴」(作品社)と「『死』を前に書くということ」(講談社)を読みました。

私にとって「秋山駿」と言えば大学時代の文学研究部(文研)の活動を思い出させる名です。65年、大学に入学して「文研」に入ったころ、小林秀雄合評会か何かで先輩たちがさかんに「秋山駿の小林秀雄論が素晴らしい」と話していたからです。

その後、秋山駿の本が出て合評会が行われ、「新しい評論のありか」「石塊の思想」などと語られていましたが、「評論」には当時興味も湧かず、「小説」や「詩」の友人たちと関わり、以来縁はなかったのですが、Yさんがカルチャーセンターで秋山駿の指導で小説を書きはじめた本を送ってくれたので、読み始めました。今回の2冊を読んで、改めて、秋山駿の生涯の覚悟を感じています。

秋山駿の略歴に簡単に触れると、1930年生まれ、13歳で生母は病死。14歳で父が再婚し、15歳で敗戦を迎えます。1948年、早稲田高から早大仏文へ。そこで、早熟な友人たち「太宰治的な小説を書きたい若者と革命志望の青年たちが集う奇妙なクラス」で、熱中して語り合い、52年同人誌「批評派」を創刊。初のエッセイは「石塊にはひとつの物語がある」。60年「小林秀雄」で群像新人文賞評論部門を受賞し、以降第一線で評論活動を続け、2013年10月2日、食道癌にて死去。著者の一貫した批判精神の出発点は、敗戦に直面した少年の目です。「私の文学遍歴」の冒頭から語っています。

「私の批評の原点は、『石』です。15歳で敗戦を迎え、一挙に何もかも分からなくなって、いろんなことを自分ひとりで考えなくちゃと思っているときに、道端から拾ってきたのです。敗戦とは、人を巨大な疑問符の中に叩きこむようなものだ。何もかも分からなくなる。敗戦の翌日だって何をどうしていいのか分からない。」

灯火管制がなくなり、急速に変化していく中、自分の目と好奇心をもって社会を見渡す少年は、おそるおそる進駐軍に近寄ってチューインガムをもらう。家に

帰って「お母さん大丈夫だよ」と言いながら、頭の中はこんがらがっている。

「何を土台にしていいのかと思った。世の中で、もっとも単純で平凡でありふれていた、普通のもの……石ころだよ。ものを考えるのに、いかなる手がかりもないもの、それを相手にして思考を始めなければいけない。そういうのがのちに生きる態度になってくると、この世の中、どんなものもこの石ころの存在以上のものではない。そういう考えになっていくわけだ。今日だったら、あるいは戦前だったら、あつたような権威ね。戦後はそういう何かを否定するような雰囲気だったから、新しい文化人というような人が出てきて、『新しい時代における文化の建設』とか何とか言っているが、そういう言葉が私にはまったく遠く感じられた。」(70頁)

15歳の時の様々な衝撃や「面白さ」の経験を通して自分を信じて判断する姿勢だけが本物と偽物を見分けてきたと、鋭い意志と確信が滲みかかっています。この一貫性は、もう一冊と照応しあう関係にあるように思います。

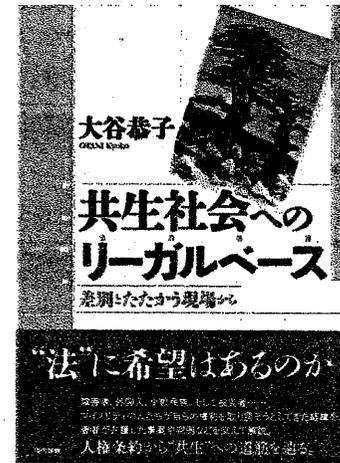
もう一冊「『死』を前に書くということ」は、「一歩一歩杖を突いて『命』が歩いている」という人生の終章の詩のような、遺言のような言葉の数々なのですが、15歳の時にうちたてた「石ころの思想」にたちかえり、自己検証し、今終章にあつても、日々死を同伴しながら思索している記録です。そしてこの死の間際に訪れる言葉は、15歳のみずみずしい感性のままに83歳を記しているようにすら読めます。若い時のノート、中やランボーと並走したような言葉が83歳の日記に再録されているのですが、それがまったく違和感がなく一体化して読めるので偉い人、大勢の言うこと、同調圧力にある「嘘」を見抜き、反対に「石ころ」のように遇される人々への畏敬にも近い優しさで同意を記す何気ない文に、著者の本音が表れています。

「信長」など含む著名な作品を読んではいない私ですが、中世を愛し、労働組合活動もし、大学、カルチャーセンターで教える著者の姿勢をこの2冊で読み取

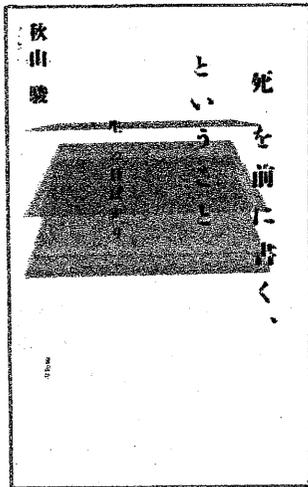
私
の
文
学
遍
歴

独自の回想

秋山駿



っています。著者はどこに居ても自分の思索をさらに鍛え上げる場として関わり、そのまま気付いたら生き終えていたという幸福な人ではないかと思ひます。著書から、著者の「天の邪鬼」のようで、「モラリスト」「皮肉屋」のようで、「照れ屋の茶目っ気」の気性を感じているのは、私だけではないでしょう。法子夫人(いつも「情況」誌の表紙をデザインしてくださっている)



に「秋山駿とのもう一つの対話」のような一冊をぜひ発行して知らしめて欲しいと思いつつ読みました。高校時代の私の一文「敬語について」に過大な批評をしてくださり、Yさんを通して励ましてくださった秋山先生に大変感謝しています。(8月15日)

「フォーリンアフェアーズ」の「なぜ国家は分裂するのか? 国境線と民族分布の不均衡」(ハイファ大学ベンジャミン・ミラー論文)では、旧ソ連や中東での紛争の共通点として、国の境界と民族アイデンティティーの間の不一致・不均衡を背景に衝突があると分析しています。

“中東では「サイクス・ピコ秩序」への反発があらわになり、民族・宗派は、国内のライバル集団よりも他国における宗教、民族的な同胞と共闘しようとする”ととらえ、不均衡に対処する4つの方法として、“①ウィルソンの民族自決の原則を下敷きいくつかの国をつくる、②複数の民族が権力を分有する。(レバノンなど)、③欧米のように国内のあらゆる人々のための国家、④権威主義体制”を示し、「要するに、現在暴力に覆われている中東地域に適用できるような優れた解決策は見当たらないが、“分離・分割などクルド人地域はうまくやれる可能性がある”と述べています。

「サイクス・ピコ秩序への反発」と片付けてしまっていますが、「サイクス・ピコ」ら、住民を無視した国境線を強いた植民地支配や第二次大戦では、パレスチナに「イスラエル建国」させてきた欧米の身勝手が「根本的に変わらず」今も続いていることこそが問題なのです。

④の「権威主義体制」のサダムやアサド政権らの破

壊を煽り、求めてきた結果が「イスラム国」に見られる「反欧米復古」をもたらしているのです。欧米の介入が新しい矛盾を拡大し、地域のスンニー・シーアの宗派的傾向やアラブ民族主義の系譜の「権威主義」権力と三つ巴の混乱。米欧の言うことを聞く勢力だけを支援する介入は、さらに住民たちの願いを離れた戦乱のみを増殖させていきます。(9月2日)

送ってくださったシオニズムに関する本のコピー「バイナショナルリズムの思想的意義—国家主権の行方」(早尾貴紀論文)興味深く読みました。

紙面不足で要旨は省きますが、「オスロ合意」の虚偽と破綻を見抜き「一国家解決=バイナショナルリズム」を提唱したエドワード・サイードの考えは、当時の左派知識人の間で、P.L.O憲章の「民主的(世俗的)パレスチナ」に立ち返るものとして、みな語っていたものです。1987年の「パレスチナ国家独立宣言」の内実を「オスロ合意」が棄ててしまったからです。

「二国家案」も「一国家案」も米欧政府がイスラエルの国際法違反の占領支配にまっとうな制裁を科さない限りすみません。反対に、膨大な軍事力で米欧はイスラエルを支援し、パレスチナ人の虐殺に加担している現状、再び強いられたインティファダのパレスチナが見えるようです。(9月8日)



124号の誤植の訂正とお詫び

- 3頁1行 ~7月10日→7月2日
- 4頁左列5月14日7行 立憲主義化→立憲主義
- 5頁右列5月19日16行 再開→再会
- 5頁右列5月20日8行 は、なかみ歌→、はなかみ歌
- 8頁左列6月3日3行 ハマスの→ハマスに
- 9頁右列6月11日下から2行 門間→門真
- 10頁左列下から15行 議会を→議会を誤得して
- 11頁左列15行 ありかいだ→アルカイダ
- 12頁左列6月16日下から4行 五原則→三原則
- 12頁右列6月19日下から8行 ひとえ トル
- 13頁左列6月20日5行 議義→抗議
- 13頁右列6月20日下から16行 再開→再会
- 15頁左列6月30日10行 来年の トル
- 15頁右列7月2日3行 GV→CV

安倍にNOだ!

辻 邦

最終日の8月6日朝、平和祈念式典で黙とうを捧げた後、多くの参加者でごった返す会場を後にした。途中、地下ショッピング街にあった街頭テレビに、式典でスピーチする安倍晋三の姿が大きく映し出されていた。何人かの市民が、安倍の姿を注視していた。だが、拍手や賛同の声はなく、みな様に厳しい眼差しで、安倍の姿を追っているように感じられた。私は、口先だけの裸の王様・安倍晋三のスピーチなどに一切関心なく、すぐにその場から立ち去った。

しばらくして、この日のスピーチ冒頭が昨年の広島大会でのそれに酷似していることを知った。また、そうした指摘があったにも関わらず、彼は長崎でも同じことを繰り返した。当然ながら、インターネット上で安倍は、「コピペ男」と糾弾された。当然であろう。それにしても、こんな男が被爆国の総理だとは……。恥ずかしくて仕方がない。

●安倍は総理不適格

正直なところ、安倍の言葉からは、「命」に対する崇敬の念が、全くと言っていいほど感じられない。「薄っぺら」としか表現できないのだ。

他方、彼の言動には、戦前の軍国主義日本への郷愁と、大企業や大金持ちへの配慮—新自由主義が強く滲み出ている。たとえば、貧者を圧迫する消費税を増税する一方で、なぜ法人税減税を実施するのか? 「大企業が儲かれば、いずれその恩恵が個人にまでもたらされる」などという、使い古された詭弁が通用すると思ひ込んでいるらしい、その軽薄な脳味噌は救いようがない。

また、福島原発事故から3年以上経過した今でも、事故終息には程遠い状況であるにも関わらず、「完全にコントロールされている」などと、ウソを平気で口にする無神経さ。しかも、そんな危険な原発を、財界の経済マフィアたちと共に外国に売り込もうとする拝金主義。

また、国民の知る権利を脅かす秘密保護法の強行採決による成立や、日本が米国の侵略戦争に巻き込まれること必至な集団的自衛権の解釈改憲問題など、安倍の周囲にはタカ派臭やキナ臭さが充満している。こんな男は、総理不適格だと断言しよう。

今こそ安倍にNOを!

●原爆ドームと資料館の衝撃

今年、8月4日から6日まで『被爆69周年原水爆禁止世界大会・広島大会』が開催された。私は今回、初めてこの大会に参加した。

初日の8月4日、平和記念資料館前から開会総会会場の県立体育館まで折鶴平和行進を行った。

原爆ドームを初めて見たのは、平和行進の出発地点・平和記念資料館前に向かう途中だった。骨組みだけの円蓋や、壁や柱が吹き飛んで空洞となった内部の有様は、まるで、太古の恐竜の化石のように思われ、しばらくの間言葉が出なかった。原子力兵器の破壊力の凄まじさに、ただ圧倒された。

午後5時過ぎにはじまった原水禁大会総会。犠牲者への黙とうが行われた後、諸団体や海外来賓のあいさつが続いたが、その中でも、広島被団協・池田精子さんの被爆体験の話が心に響いた。原爆投下直後、広島市中心の大半の建物が倒壊し、人々が理不尽に殺されたと語る池田さんも、身体に大きな傷を負ったという。

二日目の8月5日、私はいくつかある分科会の一つ、『脱原子力2 再稼働問題と日本のエネルギー政策』に参加した。そして西尾真氏の講演や、各地の反原発運動報告に耳を傾けた後、平和記念資料館を訪れた。ここでは、原爆の恐怖を語る数々の展示物に愕然とした。原爆投下の時間から永遠に時を刻むことを停めた腕時計。焼け焦げた三輪車やヘルメット……。

それら多くの展示の中で、とくに印象深かったのは、島中百合子さんの記録映像だ。母の胎内で被爆し、原爆小頭症として生を受けた百合子さんは、生まれながらにして重度の知的障害だった。彼女の父も母も、最期まで娘の行く末を案じながら亡くなったという。

短いその映像を何度も見直しながら、「いったい彼女に何の罪があるのか?」と、心底憤らずにいられなかった。

●『はだしのゲン』

5日の夕方には、被爆体験をされた女性の話をうかがう機会があった。彼女の語る原爆投下直後の惨状は、まさに『はだしのゲン』だった。皮膚が千切れ、引き摺りながら歩く人たちは、「死んでもいいから水が飲みたい」と懇願していたという。「みんな死んでしまった。こんなことなら水を飲ませてあげればよかった。」

涙ながらに語る、その方の姿が強く印象に残った。

アラブ物語(27)

「パリ事件」ハーグ闘争から日本赤軍結成へ—74年(5)

重信 房子

3 PFLPからの自立—日本赤軍の結成に向けて

1) ベイルートでは

当時、通信手段としてダイヤル直通電話で国外に掛けることはできない。衛星電話、メール、携帯ももちろんない。電報がテレックスで、中東からの通信は一日がかりでも難しい時代である。セントラルという中央電話局へ行って待つか、自宅からこのセントラルに申し込んで待つのである。もちろん、家に電話があるのは珍しい。繁華街のアパートは、各部屋に内線電話で繋がっている。私たちが当時日本人同士のセンターとして、1つのアパートをハマラ通りに借りたのは、通信事情による。アパートから、国外には掛けない。痕跡が残る、また盗聴もされるからである。国外に電話しようとするはホテルを使う。ホテルのコンシェルジュに電話を申し込み、そこから中央電話局に申し込んでもらい、待つ。ヨーロッパや日本には、2時間から5時間くらいかかって繋がる。アラブ諸国なら何時間待ってもその日は繋がらないということもある。

一番早い通信手段はテレックスだ。日本人特派員は、当時、記事通信に大変苦労していた。エジプトなどから国内にテレックス通信するのに、日本語(と書いても、当時はファックスやメールも、ワープロもない時代で、日本語とはローマ字入力して送るテレックスのこと)は禁じられていた。そのため、英文で送信しなければならない。エジプト検閲当局の検査は、英語などに限られていたためである。そのため、アラブで唯一ローマ字入力で送信できるベイルートは、特派員も多かった。また、カイロ特派員らは、送信や資料、日本食購入のために、度々ベイルートを訪れるわけであ

る。当時はこうした特派員たちと、私に関しての取材は、合意なく記事にはしないという紳士協定の上で、お互いに情報学習分析したりしていた。私たちがずいぶん助けられた。

PFLPも、こうした条件下で、アルハダフ情報センターと国際関係委員会(国際関係局ともいう)など公然部門を除いて国外との間の電話使用を原則禁止している。また、テレックスはその文面が西側に管理され、後々まで残るので、テレックスも原則禁止していた。ことに、軍事局、アウトサイドワーク局、被占領地局など、イスラエルと情報戦を強いられる部局では厳しく、一切使用しない。日本から来た当時は、いつ着き、いつ返事が届くか分からない手紙に頼らざるを得ず、国内との通信に、私はいつも困っていた。

当時、私たちが通称「お寺」と呼ぶアパートを、繁華街ハマラ通りの一角に借りていた。このアパートは日本人同士の連絡のための内線電話を持っており、74年に入って借りたものであった。日本人がベイルートに着いた折に、これまでは国際関係局のいくつかの電話のうち公然でないものを指定されていて、そこに符牒に沿って電話することになっていた。

在欧の仲間はベイルートやバグダッドで、私たち同様、PFLPの受け入れ体制を持っていて、フリーハンドで出入りしていた。「お寺」には、限られた在欧の仲間はベイルートに着いてから、直接訪れて、泊まってくこともあったし、日本からの友人もそうだった。この「お寺」は、日本人同士をセンターライズする大切な場所であった。

パリ事件のJが囁下しようとして押収された手紙に、「お寺」への電話連絡を試みたこと述べられている。通常は、レバノン入国後に電話して訪れたりするためのものであったが、非常時連絡として使用が問われたのであった。もちろん電話付きアパートは多少家賃が高い。当時家賃は200ドル以下で、維持管理費など合計で500~600ドル、日本円にして20万円近くかかった。

私たちの財政状態は、若松さんや佐々木さんがプロデュースした私の本の出版(「わが愛わが革命」講談社)の印税で賄っていた。国内の友人たちのカンパも

「連合赤軍事件」以降は、厳しい状態にあった。

「お寺」の他には、電話のない地区にボランティア用のアパートがあった。また、国際関係局との活動が多かったのも、そのすぐそばで、シヤティーラ難民キャンプの近くに、PFLPに借りてもらったアパートがあった。ここは、ハーグ闘争後の独立をめざす軍事活動部署に居住者たちの宿泊体制として確保していた。

ニザール丸岡がちょうどハーグ闘争前の8月、バグダッドに戻って来た。ニザールはアウトサイドワークのアブ・ハニとこれまでの活動をとらえかえして再編したいと思っていた。そして、もしこれまでのドバイ闘争のような軍事作戦のあり方では日本人ボランティアは参加しないと通告するつもりでいた。ところが、ニザール丸岡がバグダッドに着いて、アブ・ハニと話し始めたところで、Yのパリでの逮捕のことを聞いて、ニザールの話したいことは据え置かれる事態となってしまった。Yがパリで逮捕され、国際関係局で釈放交渉が行われていること、それがうまくいかなければ、在欧のPFLPの指揮で奪還闘争を行うという話であった。ニザールは、まず、この問題が解決してから、それらの共同総括も含めてPFLPと話し合うべきだと、判断したという。

そして、パリで逮捕された後に、国外追放されて、バグダッドに避難してきたJとアリ(目高さん)らに会い、ニザールは大変な欧州の被害を知った。ベイルートの仲間たちが事態を把握していないだろうからと、ニザールは、まず、ベイルートに行くことにした。そして、ベイルートからPFLPアウトサイドワークの今後の交渉と作戦の流れをフォローし、統括しなければならないと考えたという。ニザールはアウトサイドワークへの批判はありながら、即、みんなのために自分が何をすることが最善なのか、と動き出した。彼はいつもそういう責任感で行動する人だ。

アラブ赤軍が前年の12月にハバシユ議長と会い、PFLPから独立する体制を準備しようとしていることを、ベイルートに居なかったニザールは、私やDから定期的に聞いていた。そのため、独自の体制作りとしても、ベイルートに行かぬばと思ったという。当時は、まだPFLPの指揮下にあり、自分が日本人軍事ボランティア全体を束ねて、新しい体制を考えねばならないと思ったという。

ニザールとアリが、まずベイルートに入ることにした。こうして8月下旬から9月始めに2人はベイルートに戻った。そして、パリ事件の大被害をベイルートの仲間に伝えた。

当時、足立さんは夏休みを終えたら会議を経て帰国する予定でベイルートに来ていた。しかし、新しい事態、ことに足立さんの写真を貼った旅券も押収されたらしいことを知り、逮捕されるのに帰国はできないだろうと、様子を見ることになった。

こうしてニザールたちがベイルート体制を作り出した頃、私はベイルートに戻ってきた。パリでYばかりがJなど大被害があったこと、欧州の日本人ばかりか外国人友人たちも避難撤退中であり、PFLPとフランス側の交渉が決裂して、作戦に入ることを私にも伝えた。

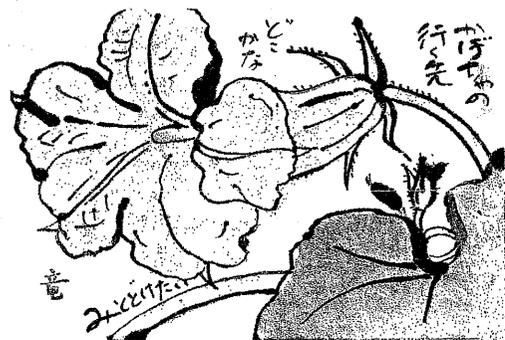
2) ヨーロッパからベイルートへの避難

すでに、ベイルートには、M、Gらばかりかアジア人などが到着しており、その対策に、身分証から居住条件作りなどに、みな追われていた。また、ブラジル人などが続々避難してくるところだと、国際関係委からも伝えてきた。

PFLPは、アシェンたちから「在欧の日本人が自らの釈放と引き換えにブラジル人を売った」という話を聞いていて、私がベイルートに戻って、まだ状況をつかめていないうちから、それについて質問をしてきた。本当なのか? 私が最も信頼し自分たちの新しい組織のリーダーに就いてもらいたかったJ。もちろん彼は誰よりもすべての情報を知っている、アブ・ハニとの関係、ホンヤク作戦とその共同する人々の組織や人物とのコンタクトを一手に引き受けていたのも彼だ。私たちの中では、Jとニザールは原則的で、機密に厳しい。作戦に参加する兵士と必要最小限にしか会わないし、会う時にも注意深く行動し、本名も名乗らない、そんないわば地下兵站活動の「プロ」と思っていた彼が、果たして「仲間を売って」自分の身を守ることがあり得ようか。

そんな矢先、9月13日、ハーグ闘争が始まった。そのため、私たちはPFLPの国際関係局と協力して、パリ事件関係者の居住条件の確保と、避難して来たアシェンら他の組織との討議を行うことを優先した。また一方で、長い旅(73年7月のHJ闘争後滞在していたリビア)から戻ったニザールと訪ベイルート中の足立さん、Dと私らで、とにかくこれまでのJも参加していた組織作りのレジュメにそって、これまでの組織の教訓総括から一つの形を作り上げるためのたたき台を作り上げることにした。

これまで組織つくりの要の位置にあったJはすでにそれどころではない、とニザールとアリが伝えてい



た。Jは自分がアラブ赤軍の武装闘争に関わりを持ったことで多くの大切な運動に迷惑をかける結果となった、もう一切のアラブ赤軍やパレスチナ支援は止める、アジアの連帯を損なってしまったと深刻にとらえているという。

本当にJの築いてきた非合法兵站工作がすべてばれてしまった。自分が活動の中で築いてきたものをアラブ赤軍と共同したことで逆に失ってしまった。他に迷惑をかけたことで消沈している。また、自供によって、自分のつもりとしては、バレてことはしゃべり、ばれていないことを守ろうとしたのだと、Jは語っていた。自供の事実、また、ブラジル人のアジトにフランスDSTの公安当局を連れて行ったことも事実だと認めていた。

彼の苦悩も分かる。私がかつてJを頼りにして無理して組織を作り上げようとしたことが能力以上の活動を広げ、破綻させてしまった。この責任は彼ではなく、彼と共に突っ走ろうとしてきた私の責任でもあった。彼の痛みも分かる。アシェンたちは、Jを査問するなどと言っているのだから、またJが登場しては、いくつもの組織を巻き込んで話を大きくしてしまう。「Jを人民裁判にかける」と怒っているのだ。私は、これはもうJの自供から被害をこうむったアシェンらに私が謝り、彼らの要求、賠償や謝罪をすべて私のところで引き受けるしかないと思った。

私の対応は「まあまあ」路線というか、技術的であったが、とにかく、私が対外関係対策にあたることにした。そして、すでに始まった作戦フォローはニザールが行い、夏以来の会議の方向は、作戦後にニザール、

足立、D、私で準備することになった。

一方、作戦は、そのころYをフランスからオランダに移送させた。作戦部隊が賠償金を要求したとラジオが伝えた。

9月17日、作戦部隊は、Yの釈放、30万ドルを得て、夜アデンへと向かった。ところがアデンは着陸を許可せず、やっと給油を許しただけだった。PFLPの指示でアデンに向かった部隊は、そこで立ち往生してしまった。そして、唯一着陸を許可したダマスカスに向かった。事態を案じて見守っていたペイルートのPFLPの国際関係局の友人たちは「お金を持ってきたことが受け入れを困難にした」と言う者もいたし、「もう少し時間をかけてアデン空港で粘るべきだった」と言う者もいた。彼らは作戦に関係しない部局だが、PFLPにとっては、良い関係にあるアデンに降りず、悪い関係にあったシリアへ着陸し、投降してしまったのだから、仰天するのも無理なかった。また、私たちボランティアも、アデンでは訓練をやっていたし、また、半年前の74年2月のシンガポール・クウェート作戦の時には、アデンに到着している。当然アデンにスムーズに行くのだろうと考えていた。シリアについては、私たちもよく分からない。「シリアは、PFLPをつぶそうとしている」とか、「気をつける!」と、常にPFLPからシリアの危険を伝えられていた。その割りに、ゴラン高原にはPFLPの戦場も兵舎もあった。

シリアとイラクとは敵対関係にはあったが、シリア側はイラクとPFLPを同等に見ている訳ではないと、私には思えた。(つづく)

後記

ガザでイスラエルがパレスチナ人に対して行っている行為は、彼らが言うような自衛でもなければ、防衛でもありません。一步譲って戦争状態でもありません。武器・戦車その他に格段の違いがあるからです。ジェノサイド大量殺戮に他ならないでしょう。イスラエル人は半世紀にわたってパレスチナ人に対する非人道的な攻撃や弾圧、殺戮、虐殺の限りを尽くしてパレスチナを占領してきましたが、この間のネタニヤフの傲慢な戦略は、そうしたイスラエルの過去を振り返るところか、逆に、この際一気にパレスチナ人を殲滅してしまおうとも思っているかのような無差別攻撃です。イスラエルには、こうしたイスラエルのありように疑問を抱く当たり前の人間は居ないのか?と置いてしまいます。少しは居るようですね。重信さんの「独居り」の中にも記されていました。そういう人たちと共に国際的な絆を鍛えていくことが、変革のばねになってゆくでしょう。ネタニヤフは気づいていないようですが、彼のような身勝手な論理で、パレスチナ人をなぶり殺しにしていくような在り方は、速くないうちに思わぬしっぺ返しを受けるでしょう。日本の人々には、それが遠い国の出来事のように思えるのかもしれませんが、そうではありません。安倍政権のこの間の日本人そして、近隣のアジア人を踏みつけて、戦争への道を切り開こうとするあり方には、根本のところでもネタニヤフと同じような、人々を無視して己の野望へと突き進む政治の質が見え隠れしています。 Y

連絡先 〒105-0004 東京都港区新橋2-8-16 石田ビル5階

救援連絡センター 気付 「重信房子さんを支える会」

郵便振替 00110-4-613941 オリーブの樹

頒布価格 500円

「正誤」表

第 125 号

- | | |
|-------------------|---|
| ① 3P(7/6)左3行目 | <u>初まりを</u> → <u>始まり</u> |
| ② 4P(7/10)左4行目 | <u>草々</u> → <u>早々</u> |
| ③ 6P右上から19行目 | <u>再開乾杯</u> → <u>再会乾杯</u> |
| ④ 7P左上から(註) | <u>対戦車手榴弾発射器</u> → <u>対戦車ロケット弾</u> |
| ⑤ 8P(8/1)左7行目 | ～ <u>岡真理さんが</u> → <u>岡真理さんの記事が</u> |
| ⑥ 9P(8/4)左下から2行目 | <u>民衆の暴力</u> → <u>民衆への暴力</u> |
| ⑦ 12P(8/27)左4行目 | <u>パレスチナ自地区</u> → <u>パレスチナ自治区</u> |
| ⑧ 14P左下から9行～10行目 | <u>法律や論</u> → <u>法律論や</u> |
| ⑨ 14P右上から15行目 | <u>2100年以降</u> → <u>2010年以降</u> |
| ⑩ 15P右下から22行～21行目 | <u>通うして</u> → <u>通して</u> |
| ⑪ 15P右下から7行目 | 読める <u>ので偉い人</u> →読める <u>のです。偉い人</u> |
| ⑫ 15P右下から2行目 | <u>中世を</u> → <u>中也を</u> |
| ⑬ 16P右下から8行目 | <u>1987年の「パレスチナ国家独立～」</u>
→ <u>1988年の「パレスチナ～</u> |